

「彼岸過迄」読書メモ

連載に先立って掲載された「彼岸過迄に就いて」（「東京朝日新聞」明治45年1月1日）で、漱石は修善寺の大患後の心境とひさしぶりの小説執筆の意欲を述べ、「彼岸過迄」というのは元日から始めて、彼岸過迄書く予定だから単にそう名付けた迄に過ぎない実は空しい標題である。かねてから自分は個々の短編を重ねた末に、其の個々の短編が相合して一長編を構成するように仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだろうかという意見を持っていた。が、ついそれだけを試みた機会もなく今日迄過ぎたのであるから、もし自分の手際が許すならば此の「彼岸過迄」をかねての思惑通りに作り上げたいと考えている」と記している。

なお、明治44年の「断片五六B」に本編に関わると思われるいくつかの項目名と登場人物のメモがある。

また、明治43年、44年の日記の記述も利用されている。

明治45年（1912年）、修善寺の大患後に初めて執筆された作品。後期三部作の第一作とされ、作品冒頭に漱石の前言が付されている。神田小川町近辺に母親と住む須永市蔵は、従兄妹の田口千代子との結婚を望むが踏み切れない。大学を出たばかりの友人・田川敬太郎は内気な須永とは対照的な性格で、須永の叔父から命ぜられた「探偵」の仕事を黙々とこなす。須永の行動とエピソードを軸に、さまざまな人間模様を描いた作品で、明治末の東京の雑踏と、人々の息遣いを感じさせる緻密な描写が特徴。

前年11月、夏目家の五女・雛子が2歳を前にして急死している。漱石は悲しみに暮れ、雛子の誕生日に本作の第一章を起稿、百か日に脱稿したという。

漱石は、明治44年年末から「彼岸過迄」を書き始めた。

この作品は、いわゆる三部作「三四郎」「それから」「門」の欠陥を埋めようと考え、主人公たちの行為や心理の複雑な動きと変化を、社会とのかかわりの中で照らし出そうとした。「雨の降る日」の部分には、末娘ひな子の急死への無念が表現されている。

44年2月、文部省から文学博士号の授与という通達を受けたが、漱石は辞退した。

文部省は発令済みだから辞退できないと言い渡したが、彼は徹頭徹尾拒み続け、対立は2カ月に及んだ。文部省あての書状草稿にはこうある。

「今日迄ただの夏目なにがしとして世を渡ってまいりましたし、是から先も矢張りタダの夏目なにがしで暮らしたい希望を持っております。従って、私は博士の学位をいただきたくないであります。」

文部省はこれを認めなかったので、新聞紙上で公表して対抗した。

あらすじ

「風呂の後」

大学を卒業して仕事に就けないでいる田川敬太郎の人物像が、同じ下宿の住人で、さまざまな仕事を遍歴した森本と比較して描かれる。

「停車所」

大学の友人の須永の叔父で実業家の田口に就職を頼む決意して、須永の家を訪ねると一人の女が家にはいるのを目撃する。須永から紹介された田口からはある時間に小川町の停車場に降りるある男の電車から降りてからの 2 時間以内の行動を調べて報告しろという依頼を受ける。敬太郎はそれを実行する。停車場には女が人を待っていて、調査の依頼がされた男はその女性と町を歩く。ミステリー的な風味を評価する解説もある。

「報告」

「停車場」の種明かしの章で、田口から、調査した男への紹介状をもらって、敬太郎は男を訪問する。男は義兄の松本で、女は田口の娘の千代子であったことが明かされる。松本は働かないで、財産で高等遊民として暮らしている。このイタズラを通じて、敬太郎は田口の家に入出入りすることができるようになった。

「雨の降る日」

前の章で松本が雨の日に面会をことわった理由として、雨の降る日に幼い娘が突然死んだ話とその葬儀の話である。漱石自身の五女・雛子が 1 才で急死した時の気持ちを松本に託した章である。

「須永の話」

須永と千代子の恋愛の話である。この章では語り手が須永に変わる。須永の母親は千代子と須永の結婚を強く望み、千代子も須永に好意をよせているが、須永はそれから逃げようとする。「千代子が僕の所へ嫁に来れば必ず残酷な失望を経験しなければならない。彼女は美しい天賦の感情を、有るに任せて惜気もなく夫の上に注ぎ込む代りに、それを受け入れる夫が、彼女から精神上的の營養を得て、大いに世の中に活躍するのを唯一の報酬として夫から予期するに違ひない。・・・僕は今云つた通り、妻としての彼女の美しい感情を、さう多量に受け入れる事の出来ない至つて燻ぶつた性質なのだが、よし焼石に水を濺いだ時の様に、それを悉く吸ひ込んだ所で、彼女の望み通りに利用する訳には到底も行かない。もし純粋な彼女の影響が僕の何処かに表はれるとすれば、それは幾何説明しても彼女には全く分らない所に、思ひも寄らぬ形となつて発現する丈である。万一彼女の眼に留まつても、彼女はそれをコスメチックで塗り堅めた僕の頭や羽二重の足袋で包んだ僕の足よりも難有がらないだらう。要するに彼女から云へば、美しいものを僕の上に永久浪費して、次第々々に結婚の不幸を嘆くに過ぎないのである。」などの一節がある。

「松本の話」

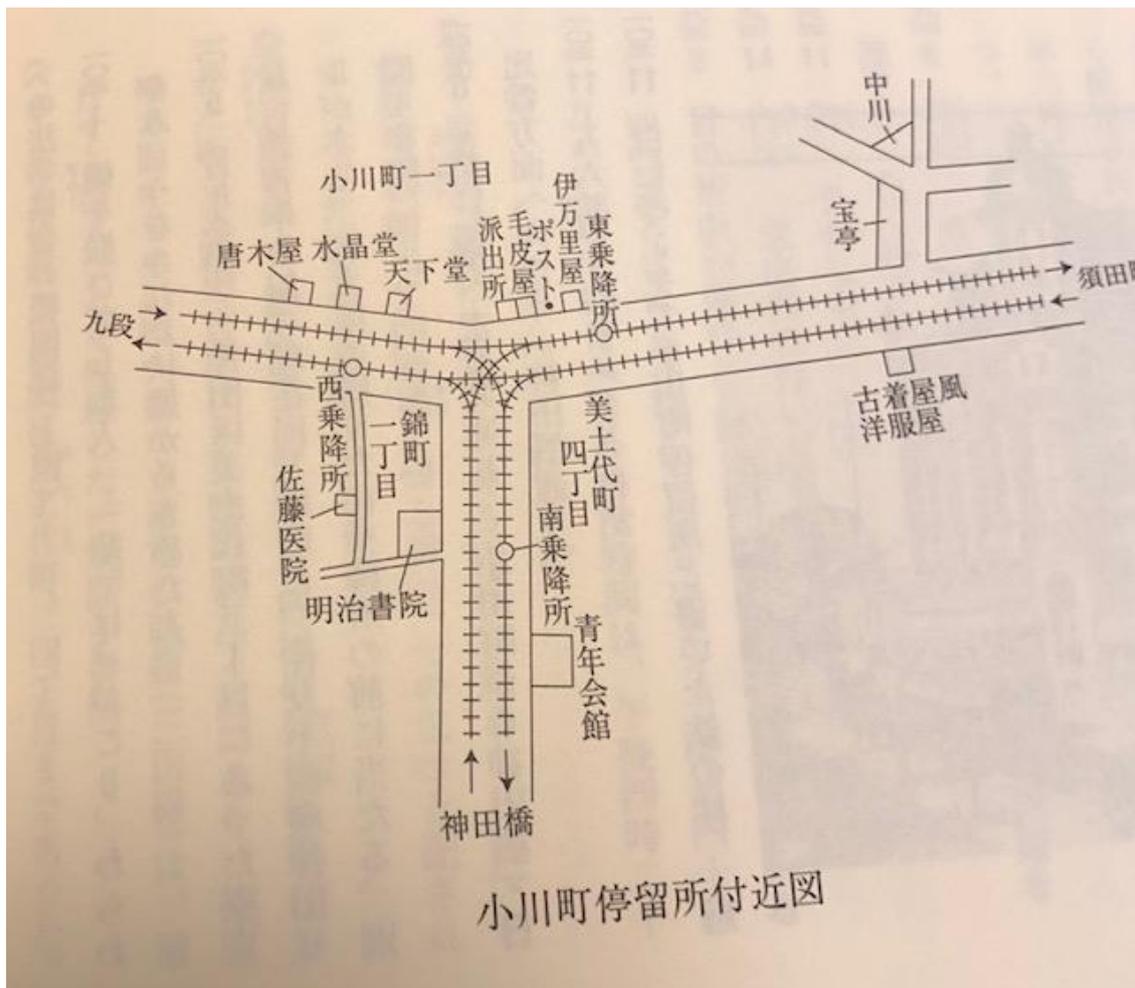
松本が語り手となって、須永の千代子をさけようとする気持ちが、須永が母親の実の子供でなかったという出生の秘密にあったことが明かされる。松本は須永に意見して、須永

は気持ちの整理のために、関西に一人で旅にでる。須永からの手紙がとどくようになり、内向から世間への関心をもつようになってきていることが示されて物語はおわる。

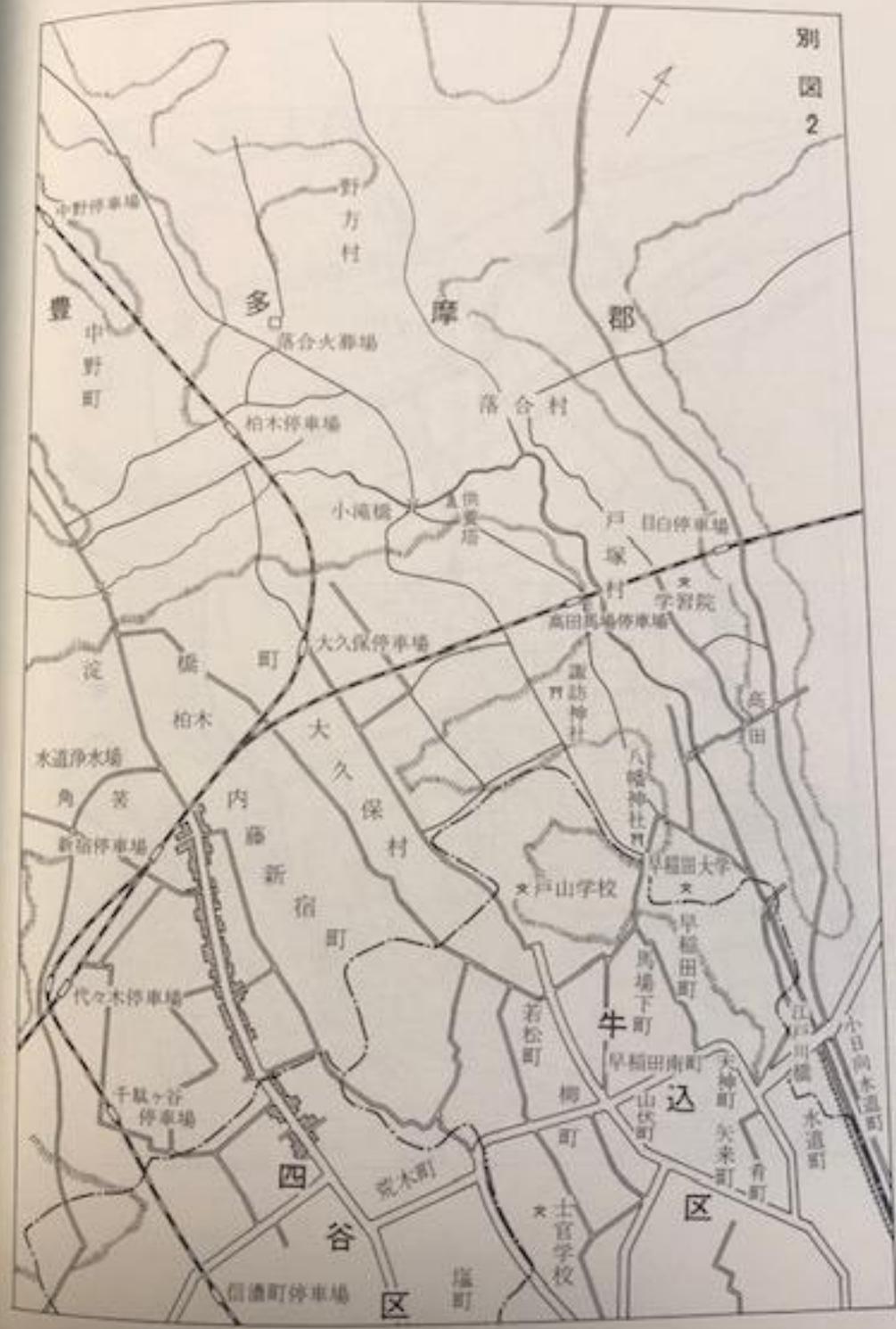
「結末」

敬太郎の話は冒険に始まり、須永の話で終わる。

敬太郎は、この劇がどう流転していくのだろうと、空を見上げて考えた。









別図 1

至江戸川橋
九段下

至巢鴨

本郷台町

森川町

南神保町

御茶ノ水

本郷三丁目

帝国大学

神田橋 錦町

駿河台下

小川町

神田明神

美土代町

須田町

松住町
万世橋

不忍池

上野広小路

上野公園
上野駅

車坂町

浅草橋

柳橋

東本願寺

ルナパーク

両国橋

高等工業学校

浅草公園

浅草寺

桐田川

広小路
雷門

既橋

仲見世

両国駅

駒形堂

吾妻橋

亀沢町

彼岸過迄 明治 45 年（1912 年）1 月

短編を重ねて長編とする漱石の新たな試みが行われた作品。「風呂の後」では大学の法科を出て就職口を探している冒険好きの田川敬太郎と、同じ下宿に住む不思議な男・森本との交流が描かれる。続く「停留所」「報告」では敬太郎が実業家・田口要作の依頼によってある紳士の行動を探偵する話が、そして「雨の降る日」では田口の義兄である松本恒三の末娘の死が描かれ、「須永の話」「松本の話」では須永とその縦妹である千代子との縁愛および須永の出生の秘密が語られる。

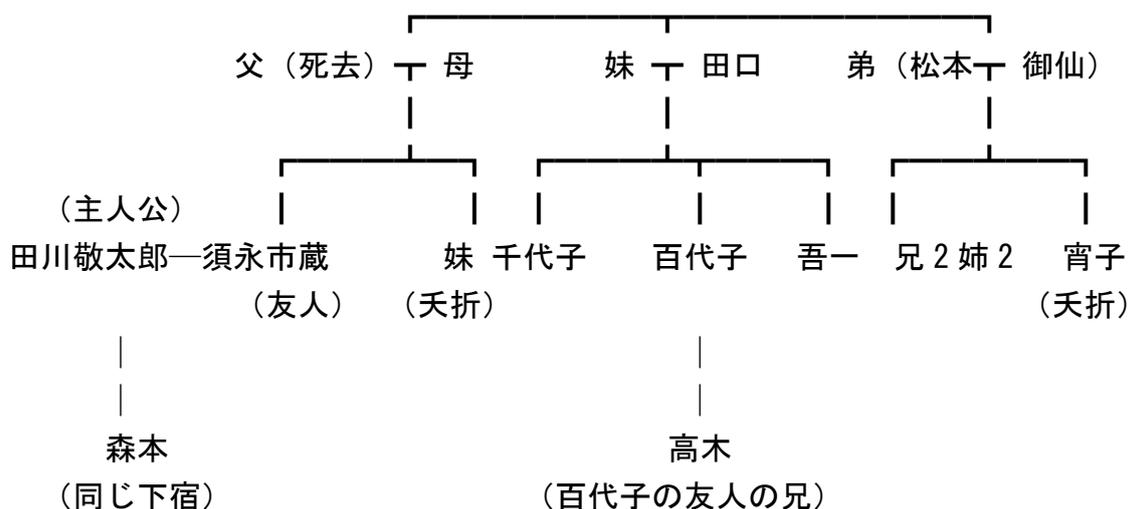
あらすじ

冒険好きの青年・田川敬太郎は、就職活動もそっちのけで友人・須永の叔父、実業家の田口の依頼である男を尾行したりしている。

しかし、田口にろくな報告をできなかった敬太郎は、男を訪ねて話をするにすることにする。果たして男と一緒にいた女は田口の長女・千代子であり、男は須永のもう一人の叔父・松本であったことを知る。千代子は須永が親密でありながら結婚に踏み切れずにいる相手だった。

以後、話は千代子と須永との立ちいかない恋愛と、その数奇な出自をめぐる物語に移行し、悩める須永の告白をもって、敬太郎の冒険は終わる。

関係図



ストーリー

「彼岸過迄」は六つの短編から成り立っています。「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」で、それらが連なって長編小説が完成するといった仕組み

になっています。

「風呂の後」

前半の主人公田川敬太郎は大学を卒業しましたが、まだ職に就けていません。同じ下宿に住む森本と風呂で出会い、面白い話を聞くのですが、その森本は突然満州に夜逃げをしてしまいます。

「停留所」

敬太郎は友人須永市蔵の叔父である田口要作を紹介して貰います。その田口から敬太郎は、ある男の探偵を命じられますが、結局はその男と若い女と一緒に食事をしたという以外、大した情報も得ることが出来ませんでした。

「報告」

田口に大した報告も出来なかった敬太郎ですが、田口は敬太郎に調査した男への紹介状を書いてくれます。男は松本恒三という綱が野もう一人の叔父で、高等遊民として暮らしていました。一緒にいた女は田口自身の娘、千代子だったのです。

「雨の降る日」

敬太郎は田口に言われたまま、松本に会いに行きますが、その日は雨の日だったので会ってくれませんでした。実は松本は雨の降る日、来客中に愛娘を突然亡くしてしまった経験があり、それ以後雨の降る日には人に合わないのだと、敬太郎は千代子の口からききます。

「須永の話」

須永と千代子は許嫁のような関係にあり、須永の母もその結婚を望んでいましたが、田口はあまり乗り気ではなく、須永自身も気が進まないでいました。しかし、高木という男の出現により、須永は強い嫉妬を感じます。須永の態度を見て、千代子は、自分を愛してもいないのに何故と須永に詰問するのです。

「松本の話」

須永は親戚の中にあって、絶えず深い孤独を感じていました。それを心配した叔父の松本は須永の悩みを聞きます。松本に対して激高した須永に対して、松本は、須永が実の母の子供ではなく、小間使いの子だと、彼の出生の秘密を打ち明けたのです。

「彼岸過迄」は明治45年1月から連載が開始されたのですが、その前年の明治44年、誰よりもかわいがっていた漱石の五女雛子が原因不明の病気で死んでしまいます。漱石の悲しみは相当なものだったと言われています。

その時の総遺跡の心痛な思いは「彼岸過迄」の中の「雨の降る日」の章で見事に表現されているのです。作品のなかでは雛子は宵子という名前で登場しているのですが、漱石自身「雨の降る日」を執筆した後、「いい供養をした」と語ったと言われています。

宵子の死は、「彼岸過迄」の中の「雨の降る日」の章で、敬太郎が松本に会いに行くが、松本が雨の降る日には、客と会おうともしないエピソードが語られます。

松本には一三歳の女の子を筆頭に、五人の子どもがいたのですが、五番目の女の子が二歳になる宵子で、千代子自身も一番かわいがっていたのです。透き通るような肌と大きく黒い眸、宵子はまさに真珠のような女の子でした。

ある時、千代子を囲んで家族が団欒していると、豆の中を一人の訪問者が紹介状を持って訪ねてきました。松本が相手をしている間に、その事件が起こったのです。

千代子をご飯を挙げている時に、宵子の心臓が突然停止したのです。漱石はその後、通夜、葬式、骨拾いと、自分が実際に宵子を弔うように、淡々と描写していきます。

その日以来、松本は雨の降る日はだれとも合わなくなります。おそらく宵子が死んだ日のことを思い出すからでしょう。